

研究報告書第63号

F 8—0 1

—山形県教育センター委託事業—

豊かな心を持ち、たくましく生きる力を育てる
生徒指導に関する研究

1997. 3



山形県立図書館



1-0388672-9

山形県教育文化フォーラム

—山形県教育センター委託事業—

豊かな心を持ち、たくましく生きる力を育てる生徒指導に関する研究

一九九七・三

山形県教育文化フ

377.45

マ

平成9年3月刊

豊かな心をもち、たくましく生きる力を育てる生徒指導に関する研究

山形県教育文化フォーラム

目 次

I 研究のねらい

II 研究の進め方

第1年次(平成6年度)

第2・3年次(平成7・8年度)

III 研究の内容

基本的な考え方

What? 他を通して見えてくる自分

「自分とは何か」の問いと他の存在

Why? 希薄な人間関係の改善

「絆」と「自由」を行き交う中での自分探し

How? 人間関係の新しい視座

三つのかわりを創る

「大まかな手」に「細やかな節」を

実践事例

○ 小学校編

見えてきましたか 38の夏休み

広げよう!読書の輪、友だちの和

私たちの調べたことを、よく聞いてよね

卒業までに何かをしたい

全員が主役!ぼくらの運動会

自分を知り、友を知る

みんながもってるステキな一面

持久走、みんなで走れば…パワーアップ

○ 中学校編

積極的に行動できる自分をめざして

みんなでつくろう新生徒会

WHAT?が拓くTHEY世界への旅

もう一人の自分を友が見てくれている

感性は自分の生き方を見つめる

平和な未来を築くために

共感し、認め・支え合える友がいる

IV まとめと今後の課題

研究の概要

- 1 いじめや不登校など、その発生予防に根源的に機能する教育活動の在り方を生徒指導の視点から明らかにしていくことをねらった研究です。
- 2 調査の結果、心的エネルギーを喪失し、かわりをつくれないうちどもの実態が見えてきました。
- 3 子どもの成長過程に着目して考えました。
 - ・ 絶対必要な通過点を不通過させている「大人の手」が見えます。
 - ・ 学校が「いい子」の演出に躍起となり、家庭が両親と両祖父母の愛で6つのポケットを膨らます「かわいい子」に仕立て上げているとしたら、
 - ・ この手によって失われるもの、それは「心の育ち」の自覚です。
- 4 「心の育ち」にとって越えるべき3つの「過渡期」を考えました。
就学前と小学校中学年を第一・第二過渡期としました。
本研究が最も注目したのは、

小学校から中学校にかけての第三過渡期です。

小・中間の段差が子どもの心に影響を及ぼしていると考えたのです。
段差を「埋める」ことより「越える力」の育成に着目していきました。

- 5 「心の育ち」の自覚は、「自分探し」を意味します。本研究は、それを「人間的なふれあい」に求めました。
それが、仮説からくる次の基本的な考え方です。

- ① 他を通して見えてくる「もう一人の自分」への気づきを促す人間的なふれあい
- ② 希薄な人間関係の中での「自分探し」に求められる「絆」と「自由」の行き交い
- ③ 豊かなかわりを育む学級作り
 - ・ 果の暖かさをもつ学級 ・ 自制心の働く学級
 - ・ 協働や主体指向の競争による自己向上心が湧く学級

これを実践場面を通して示しました。

キーワード (生徒指導) (心の育ち) (人間的なふれあい) (過渡期)

は し が き

本研究は、今年度新しく設置された山形県教育文化フォーラムが、県教育センターから委託された事業の一つとして、過去二年間県教育センターが実施してきた研究を引き継ぐ形で完成させたものであります。

山形県教育文化フォーラムは、広く教育文化の環境づくりに役立つことを願って、昨年四月に発足しました。心豊かで主体的な子供の育成を目指し、いじめ・不登校などの今日的教育課題を解決するためには、学校教育における努力はもちろん、家庭や地域の教育力の向上が必須であり、そのために、子供たちを取り巻く社会全体の支援を具体的に推進する必要があります。そういう課題に対応するための組織として山形県教育文化フォーラムは結成されました。その結成の初年度に県教育センターから受託する事業の一つとして、今回のテーマは誠に適当であったと言うべきでしょう。すなわち「豊かな心を持ち、たくましく生きる力を育てる生徒指導に関する研究」であります。

本研究は、「研究の概要」でも述べておりますように、子供の「心の育ち」にとって越えるべき3つの「過渡期」を考えました。就学前を第一、小学校中学年を第二、小学校から中学校にかけてを第三の過渡期と考え、そしてこの第三の過渡期に最も注目をしました。小・中間の段差が子供の心に大きく影響していると考え、その段差を「埋める」ことよりも「越える力の育成」に着目したのであります。一人一人が豊かな心を持ち、人間的触れ合いの中で、明るく楽しい学校生活を築くことができる具体的な教育活動のあり方を、小学校中学年から中学校にかけての児童生徒について、生徒指導の視点から明らかにするというねらいであります。

平成6年度以来、本研究のために御協力いただいた学校、並びに研究協力者の方々に深く感謝申し上げます。また本年度から当フォーラムが受託したとはいえ、企画の段階から第一・第二年度の本研究を進め、本年度も何かと御指導御協力くださった山形県教育センターの各位に心から御礼を申し上げます。

本報告書が先生方の座右にあって、指導の一助となりますなら、そしてひいては教育の振興に寄与し得ますならば、発足初年度の当フォーラムにとってこの上ない光栄であり喜びであります。

平成9年3月

山形県教育文化フォーラム

会長 日野 顕 正

研究協力者

《平成7年度》

天童市立高揃小学校	教諭 東海林敦子	教諭 長谷川隆子
鮭川村立鮭川小学校	教諭 佐藤 秀一	教諭 箱山 直子
米沢市立北部小学校	教諭 本田 雅人	教諭 太田 順子
羽黒町立第二小学校	教諭 鈴木 康喜	教諭 菅原 里司

《平成8年度》

天童市立第三中学校	教諭 五十嵐 晋	教諭 関 浩
新庄市立八向中学校	教諭 原田 浩明	教諭 大江 香樹
米沢市立第三中学校	教諭 後藤 満男	教諭 後藤 信美
八幡町立八幡中学校	教諭 出嶋 睦子	教諭 小野 潔人

研究担当者

《平成6年度》

県教育センター

指導主事 西山 道雄
指導主事 池田 正
指導主事 中山 英行
指導主事 伊藤 憲一

《平成7年度》

指導主事 西山 道雄
指導主事 池田 正
指導主事 中山 英行
指導主事 中村 辰彦

《平成8年度》

県教育文化フォーラム

研究部長 白畑 博
主任研究員 鈴木 一志
主任研究員 木村致洋子
主任研究員 秋場 福廣
研究員 本田 勝市
研究員 吉田 祐子

主任研究員 佐藤 毅
主任研究員 原田 克彦
主任研究員 五十嵐敬司
研究員 中野 智嘉
研究員 鈴木 弘康
(兼指導主事)

目次

I 研究のねらい	1
II 研究の進め方	2
III 研究の内容	
基本的な考え方	
What? 他を通して見えてくる自分	
「自分とは何か」の問いと他の存在	3
Why? 希薄な人間関係の改善	
「絆」と「自由」を行き交う中での自分探し	5
How? 人間関係の新しい視座	
三つのかわりを創る	7
「大まかな手」に「細やかな節」を	9
実践事例	
○ 小学校編	
〈4年国語科〉見えてきましたか 38の夏休み	11
〈3年国語科〉広げよう！読書の輪、友だちの和	13
〈5年総合学習〉私たちの調べたことを、よく聞いてよね	15
〈6年学級活動〉卒業までに何かをしたい	17
〈4年学級活動〉全員が主役！ぼくらの運動会	19
〈5年朝の会等〉自分を知り、友を知る	21
〈3年学級活動〉みんながもってるステキな一面	23
〈6年学級活動〉持久走、みんなで走れば…パワーアップ	25
○ 中学校編	
〈1年学級活動〉積極的に行動できる自分をめざして	27
〈3年生徒会〉みんなでつくろう新生徒会	29
〈1年学級活動〉WHAT?が拓くTHEY世界への旅	31
〈2年学級活動〉もう一人の自分を友が見てくれている	33
〈1年学年活動〉感性は自分の生き方を見つめる	35
〈2年学年活動〉平和な未来を築くために	37
〈3年学年活動〉共感し、認め・支え合える友がいる	39
IV まとめと今後の課題	42

I 研究のねらい

子ども一人一人に「人間的なふれあい」を通して「心の育ち」の自覚が生まれるような教育活動の在り方を、生徒指導の視点から明らかにする。

今、なぜ「生きる力」が求められるのでしょうか。
また、それを求める変化とは、何だったのでしょうか。

戦後、日本は「近代化」という変化の中にありました。
スピードアップを誇りにし、
生産性の向上と製品の画一化に努め、
管理の強化によってミスを抑えてきました。
→ところが、こうした大量生産向きの価値観は、
人間の画一化という問題を抱えていたのです。

一方、学校の中の問題にも変化が生じてきました。
学校恐怖症時代の登校拒否が不登校へと変わり、
「いじめ」の中の傍観者に目が向けられ始め、
大人になりたくない成長拒否の拒食症が見つかりました。
→そこには、心的エネルギーの喪失した、
かかわりをつくれない子どもの存在があったのです。

本研究は、平成5年の初秋に策定されました。その頃、県民の心には、あの1月13日の「晴れない空」が重くのしかかっていました。

巷で「教師」と名のらず、冷たい視線を避けた自分を忘れてはいませんか。

教師が、学校が「信頼回復」の対象にされることは、最大の屈辱です。不信の中では、子どもは人質なのです。

「子どもが変わった」と嘆く教師より、変えてしまうおのれの存在に対して自ら忸怩（じくぢ）たる教師でありたい。

生きる力の育成には、マニュアルも即席も、うそもごまかしもない。ただひたすら目の前の子どもに対して、「何かできると信じる」まなざしを向けてやることのできる、「やっていることの意味を価値づける」学びの保障を怠らない教師でありたい。

そんな願いをこめて本研究はスタートしました。

II 研究の進め方

第1年次（平成6年度） 基礎研究と調査

子どもの心の状態などについて、以下の4つの視点から実態をとらえてみました。

- 視点1 どんな心が備わっているか。……………＜心の様子＞
⇒ ▷感謝する心、家族を大切に思う心
▶他に尽くそうとする心、古いものを大切にすること
- 視点2 何について、どのような感動体験をしているか。……………＜感動体験＞
⇒ ▷多様な刺激に反応
▶成長とともに減っていく感動体験
- 視点3 自立の実態はどうなっているか。……………＜自立性＞
⇒ ▷将来に夢がある、自分のものは大切にすること
▶わかっているのに、やれない「わたし」
- 視点4 人間関係はどうなっているか。……………＜人間関係＞
⇒ ▷困っている人を助けたい、
▶友だちの輪に入れない、教師は話相手の対象外

第2・3年次（平成7・8年度） 研究仮説の設定と実践研究

研究仮説を設定しました。

- 1 仮説設定の基本的な考え方
常に**What**（意味）・**Why**（必要）・**How**（方法）を問うことで、ねらいとする「心の育ち」と「人間的ふれあい」の吟味と統合を図っていきます。
- 2 研究仮説
鏡には映らない自分が、他を通して見えてくる ＜What＞
⇒ p. 3 「自分とは何か」の問いと他の存在
今、その他が多様に広がる反面、希薄な人間関係が指摘される ＜Why＞
⇒ p. 5 「絆」と「自由」を行き交う中での自分探し
人間関係を次の観点からとらえ、生徒指導の新たな視座とする ＜How＞
⇒ p. 7 三つのかかわりから生まれる豊かな人間関係
⇒ p. 9 「大まかな手」に「細やかな目と節」を

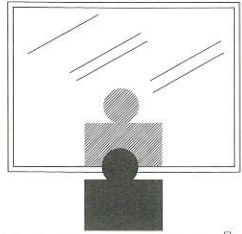
研究協力者を委嘱し、平成7年度は小学校4校、平成8年度は中学校4校において仮説に基づいた授業実践をしていただき、それに考察を加えてまとめました。

III 研究の内容

最初に、「基本的な考え方」が述べてあります。

次に、「実践事例」が見開き2ページで示してあります。見出しに本質を語らせたつもりです。

「自分とは何か」の問いと他の存在



毎朝、髪を櫛けずり、

自分の姿を鏡に映す。

見ては、満足したり、直したりする。

『一人一人を伸ばす学習指導の評価に関する研究』H7、3刊——

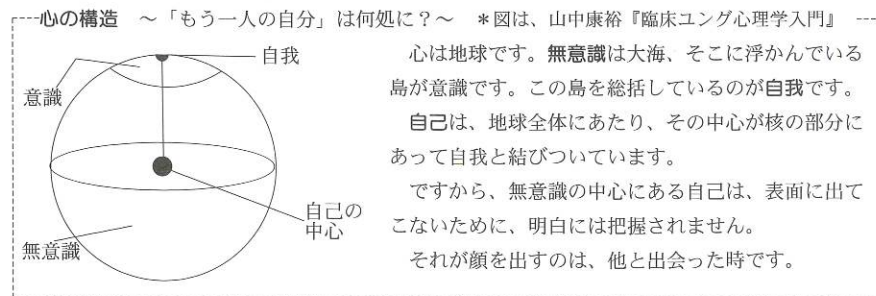
自己評価「鏡論」では、上の場面に、「誰からも強要されない主体性」と「自分が自分を見ている客観視」という二つの価値を見いだしています。

また、自己評価における三つの鏡の機能を明らかにするとともに、それが「友だち」や「教師」、ひいては「もう一人の自分」であるとしました。

○「自分」は、「他」によって明らかになる。

⇒ これは、本研究でもねらっているところです。

ただ、「もう一人の自分」について若干の説明を加えなければなりません。



⇒ 「もう一人の自分」とは他によって目覚める「自己」であり、それが既存の「自我」との間で対話する。つまり、考えることの原型を表しています。

人生とは自分への旅である（ヘルマン・ヘッセ）

阪神・淡路の震災から2年、ものの復興が進むの陰で、心の復興という大きな問題が生まれてきています。

A子さん、30年以上連れ添った夫を失い、歩くこともできない状況におちいり、仮設住宅にこもる毎日が続きました。「夫を頼りにしていた分、わたしには何も無くなった。」と語ります。



自分に意味を見いだせなくなった彼女は、震災から1年程経ったある日、早起きを決意し、早朝の海を裸足で歩きはじめます。海は彼女を癒してくれました。おそらく、海を前にして、自分がどれほどちっぽけな存在であるかを感じたであろうし、孤独を受容できず結局は彷徨うだけの自分の不甲斐なさを感じたのでしょう。

やがて、彼女は自分史の執筆を始めました。

「自分がわからなくなりそうだったから」と。

何度か止めようかと思う度に夫の励ましの声が聞こえ、彼女は続けました。そして2年目の今、彼女は新聞の求人広告に仕事、いや実際は人との出会いを求め、清掃会社で働きはじめました。自分を見つめ直した時、彼女は、新たな自分探しの旅が始まったように思います。

(ETV特集大震災に学ぶ②「安藤衣子さんの2年」抜粋要約)

ここには、人に限定されない、もっとひろい意味での「他」の存在が見えます。

- 自分の心を癒し、生きる力を与えてくれた「海」
- 過去の自分をたぐり寄せることで、新たな人生を拓いてくれた「自分史」

「自分とは何か」に応えてくれる「他」とは何か？

⇒ 自然や書物が、感性の働くすべてのものが「自分」を教えてください。

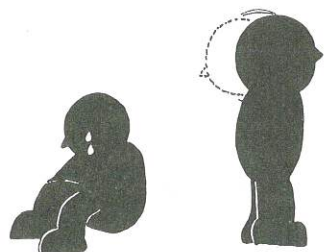
それでも、「他」の中心が人であることに変わりはありません。ただ、かかわる人間同士が互いに配慮し気遣う間柄になってきていることのようにです。

⇒ それは、相手のことをはっきり言わない「やさしさ？」なのです。

DNA診断による未来（自分の能力や寿命）の予告が可能になったら、わたしたちは、「知らない権利」を主張し、医者には「知らせない」やさしさを求めるでしょう。なぜなら、わたしたちは、未来が不明だから救われ生きていることも知っているのです。

これは、生徒指導の交流にある、人間同士の配慮という問題とよく似ています。

「絆」と「自由」を行き交う中での自分探し



渋谷や池袋に、若者が群がるように、

今、若者たちは、
相手の心に立ち入らないのも「やさしさ」と言い、
甘えて欲しい親に甘えてやるのも「やさしさ」と言う。

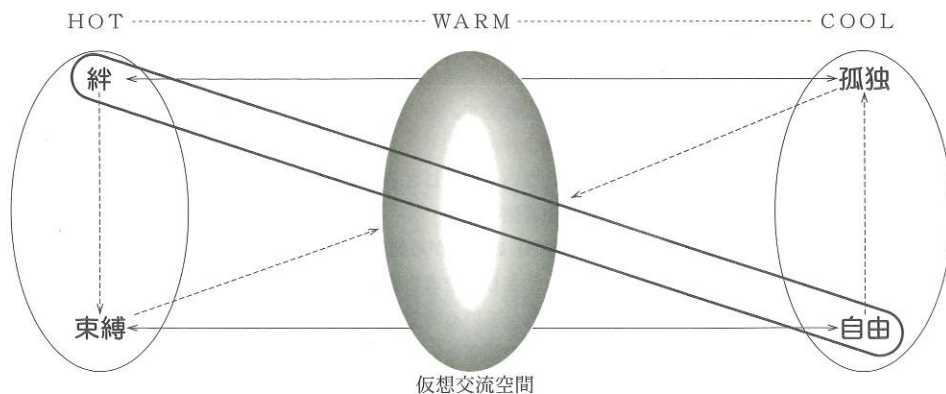
人間関係の新境地、
これを『仮想交流空間』と名づけました。

ここには、「絆（きずな）社会の束縛」や「自由社会の孤独」に耐えられなくなった人間が集まっています。

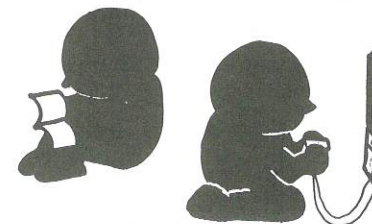
「絆」は、「きずな」と読んで「情愛のこもった関係」を、
「ほだし」と読んで「互いの自由を束縛する関係」を表します。
○かくして、情にほだされたくない個は、絆社会から逃亡します。

「自由」は、個性を開花させる土壌ですが、他に従って生きることの気楽さを味わった者は、むしろ厳しい状況と向き合うことになります。
○かくして、寄る辺を失った個は、孤独な世界から逃亡します。

⇒ 逃亡先は、ホットでもクールでもないウォームな人間関係です。



何も喋らないで、一緒に音楽を聴いたり、
ファミコンをしたり、マンガを読んでいる。



互いに責任がないから、心がない。
心がないから、失敗しても相手は傷つかない。
傷つけないから、自分が傷つけられることもない。

仮想空間におけるWarmな関係は、
⇒ 「絆がありそうで実はない、別れたらすぐ自由」という世界を行き交っている。

……「わかりません」と応えたら、先生が「何がわからないの？」と聞いてきた。「答えがわからない」なんて言ったら、先生を馬鹿にすることになるので黙っていたら、「黙っていたらわからん」ときた。わからないのはこっちなのに…と思っていたら、今度は「何でもいいから言ってごらん」とくる。言うことがないから黙っているのに。
(大平健『やさしさの精神病理』抜粋要約)

激しく真剣に意見をたたかわせているのに、雰囲気明るい学級がありました。個性への配慮が生んだ自由な土壌に、心の中に絆が育まれているのだと思います。

同時に、次のようなことに陥りがちな教師の在り方を自戒してみました。

数値至上主義……………がんばれ！

人間の心の問題まで数値化する傾向。何割が学校に復帰したとか…。数値に表せない心の安定とか、本人がよかったと思えるような感覚まで目を向けたいものです。

スピード重視……………はやく！

入念にしなければならないことを性急に求めたり、自然の治癒とか回復とか成長を待てない、ひたすら子どもが早く成果をあげることを誇りとする、ともかく忍耐がありません。忍耐とは急ぐ心を耐え忍ぶことなのです。

結果主義……………たくさん！

「難しい問題を1題やっとなら解いた瞬間こそ、本当は一番楽しい時だった。ところがそんなことをほめてくれる先生なんていなかった。そして、“まずは、解けるものから解け！難しいものは後回しだ！そしてよく見直せ！”と言うのだ。…」

子どもは、今やっていることの意味を大切にしたいのです。

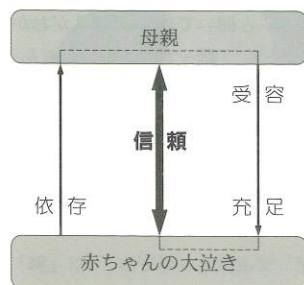
調和偏重……………同じに！

「みんなと同じように！」「目立つな！」こんな考え方が、みずみずしい感性を持ち、人間らしい創造性に満ちた可能性を子どもから奪ってはいないでしょうか。子どもたちに、異質な存在に対する怖れの意識を生んでは、人間関係は希薄になっていくばかりです。金平糖の突起のような集団こそ、相手に合わせる力としての我慢する心、感謝する心が生まれ、豊かな心を育てていくのです。

三つのかかわりを創る

三つの人間関係は、子供の成長という視点から時系列的に想定したものでした。
ところが、これらの関係が、「不通過させてはならないもの」であるとともに、常に学級なりが「内包していなければならないもの」であることに気づいたのです。

母と子の信頼



何かにおびえて子どもが泣きだすやいなや、母は子どもを抱きしめほえみかける。すると、子どもは、母に晴れやかな曇りのない眼でこたえる。

⇒ 信頼は、**やすらぎ（被包感）**の中で生まれます。

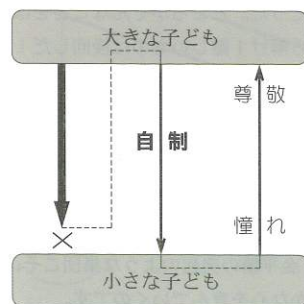
子どもが未知や冒険に挑もうとするのは、背後にいつでも帰っていける安全な空間があるという意識が働いているからです。

子どもは「そと」がきびしいほど、やすらぎの得られる「うち」に、身内として「すまう」ことを望んでいます。

⇒ 子どもは、**巢の暖かさ**をもつうちをもちたいのです。

教師は、子どもの無条件の信頼を粗暴な手で引き裂いてはならないし、やがて子どもに己れの不完全さを見抜かれるまで、母であり続けなければならないのです。

お山の大將の自制



大きな子どもが自分の力をふるいすぎると、小さな子どもはこわがって逃げていく。

大きな子どもは、力をふるいすぎではいけないことを悟り、力を調節しながら出していくようになります。

⇒ 自制という配慮は関係をよくしていきます。

やがて、小さな子どもから親愛のまなざしが向けられていきます。

教師は、子どもには強い力をもつ存在です。力で支配しつづけることは、何事もこうでなければならぬという規範を生み、毎日の生活を儀式化していきます。「給食を静かに食べる」ことが「無言で食べる」に飛躍し、それを破る者をまた力で押さえるなどということになりかねないのです。

自分に目が向く競争

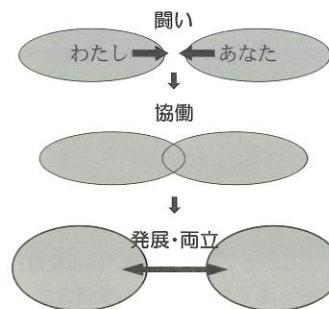
＜グレース夫妻の南太平洋アイトッタ島の実験＞

違った枚数のコインが描かれた9枚のカードを二人のうち一方の子どもに分けさせる。

・自分を多く（競い合い） ・相手を多く（気前のいい） ・同じに（平等）

小学校1～3年では、14%が競い合い、45%が気前のいいという結果となり、生活協同体としての島の実態が反映された。ところが、中学生では、競い合いは60%まで上昇し、気前のいいは10%まで下降した。夫妻は「学校生活の経験は、子ども同士を敵対的にさせている」と指摘する。

（『教育に必要な競争のあり方』児童心理H7、10要約）



他よりも優位に立とうとする欲求を、人間は本質的にもっています。本来、競争心は互いの発展のために機能しているのですが、ふだんは意識されていません。強く意識されるのは、次のようなときです。

- 「競技のスタメン争い」など……………希 少 性
- 「～まで完成しなさい」など……………時間的制約
- 「どっちが正しいの」など……………○ × 主義

こうした状況の問題は、限られた者だけしか目標を達成できない（両立不可能）ことです。

⇒ 両立不可能はいじめを含めた排除や妨害などの**他者否定**につながるからです。

学校は、子どものためしたい、目立ちたい、負けたくないという気持ちを利用して、両立できない闘いの世界に子どもを追いやることがあります。学校は、外の競争とは違う、敗者のない両立可能な競争があることを忘れかけています。

⇒ それは、**協働**によって自分の役割に目が向く、**主体指向的な競争**です。

みんなで猿を演じる場合、子どもは他と比べながらも衣装などに自分なりに工夫をしています。この見えない競争の効果を考えてみて下さい、負けもなくみんな勝者の満足がありました。…今、個々の若者が独自のファッション世界を作っています。自慢もしなければ、相手をけなしたりもしません。みんな「自分探し」で自分と競争しているのではないのでしょうか。

「大まかな手」に「細やかな節」を

「教師の手だて」というテーマで話し合ってきました。小・中・高・特殊学校の元校長7名、現任教員3名に指導主事の1名の計11名による、経験論的かつ臨床的な話し合いは広がり、やがて一つの考え方が生まれてきました。

子どもの成長は右肩上がりの一直線ではない。自分の心の成長にとまどう時もある、環境の変化に心が不安定になる時もある。「心がゆらぐ時こそ大きく成長する時」ととらえ、子どもの心を癒し励ますことのできる教師の在り方を考えてみました。

⇒ その時期を過渡期として想定してみました。



入学して、初めて山が現われる状況避けたい／第1過渡期

しかし、実際は、少子化によって「集団に揉まれたことのない」しかも「6つ（両親、両祖父母）の愛を独り占めした」ことによるわがママが見られます。

地域や家庭の教育力の低下も叫ばれる中、教師には、母のような信頼を土台に、子ども同士の交流を体験的に仕組んでいく必要があります。

⇒ **細やかな手**が求められます。

自我のめざめによるしつけの転換を／第2過渡期

「みんなよい子だね!」で保たれていたはずの統率がくずれてきます。これを叱っては信頼が遠のいていきます。子どもは、「しつけ糸」よりは「意味・納得」の世界でよさを発揮してくるようになります。

⇒ **細やかな目**が求められます。

手をかけずに目をかけろ! 心への配慮を忘れた手は、自立の目を摘んでしまいます。

過渡期を越える力の育成／第3過渡期

本研究が特に注目しているのが、この第3過渡期です。

わたしたちは、しばしば目にしてきたことにこんなことがありました。

○ 「大きな6年生」が「小さな1年生」に

運動会には大きな6年生がいました。学校の蒸気機関車として引っぱってきた自負心や効力感が自信となり、それが大きな存在感を生んでいたのです。

それから数週間後、彼らは中学校の門をくぐりました。それは、だぶつきぎみの制服を着た小さな1年生だったのです。こうした存在感の変化を感じるのには、わたしたちが、彼らの内面に不安を読み取っているからではないでしょうか。それは、小学校と中学校の間に大きな段差があるのを認めているからでもあるのです。



この段差は、埋めるよう小・中学校双方が努力すべきことでしょうが、決してなだらかにしていくことはありません。むしろ、この段差を生かして育てることを考えてみました。

⇒ 「うまく渡す」から「越える力の育成」へ

しかし、子どもが過敏でひ弱だから問題が起き、自立できないから越えられない。そして、垣根が高いから苦しみ抵抗する。

⇒ **おおまかな手にこまやかな節**が求められます。

中学校の特徴は、おおまかな教師の手であり、それが、段差となっています。かと言ってこまやかな手は必要ありません。思春期のしなやかに揺らぐ若竹にこそ、時機を得た節が必要であると考えました。指導の節々で、小学校と同様に「目をかける」ということが大切です。

見えてきましたか 38の夏休み

1 ねらい

- (1) 夏休みの思い出の写真をしながら話し合うことを通して、話したり聞いたりすることの楽しさを味わったり、進んで話したりできるようにする。
- (2) 相手の話を受けて、質問や感想を述べて、お互いのよさを気づき認め合うことができるようにする。

2 指導の着眼点

- (1) 全員の夏休み体験を発表しよう！

38人の子どもたちが、それぞれの夏休みを過ごしています。一人ひとりの心に残った体験を聞くことによって、友だちの今まで気づかなかったことがわかってきます。

⇒一人ひとりに存在感を持たせていきます。

- (2) 他者を意識した発表に

自分の思いを人に伝えたいという気持ちは、聞く力を育てていきます。自分も発表を聞いてほしいから、他者の発表にも耳を傾けていきます。さらに、友だちとのかかわりによって発表を振り返り、自分自身を見つめていくことになります。

⇒友だちを通して自分自身を振り返っていきます。



3 展開の工夫

- (1) 事前の手だて

①単元との出会いを大切にする

- 夏休みの思い出の写真や資料を収集する。
- 思い出ポケットをつくり、教室に掲示する。
- 写真や資料をもとに、グループで自由に話し合う。

⇒和やかな雰囲気を大切に！

②相手のことを考えて組立メモをつくる

- 相手（友だち）が知りたいことは何か？
- 相手（友だち）に分かりやすく伝えるにはどうするか？

⇒常に聞き手を意識して話を構成する。

- 話の構成を考えて、自分の発表を組み立てる。

⇒個に応じた教師の働きかけを大切に！

③グループで発表力を高める

- グループ内で発表練習する。（内容、声の大きさ、速さ、写真の出し方など）
 - もっと知りたい、工夫しているところ、よかったところなど、聞く観点を明確にする。
- ⇒話し手・聞き手、共に学び合う活動の重視。

- (2) 事中の手だて（＊詳細は右頁の現時参照）

⇒メッセージカードでよさを認め合う。

- (2) 事後の手だて

①全員に発表の機会を与える

- 朝の会のスピーチや「ことばの泉タイム」で、全員が発表する。

②メッセージカードを紹介する

⇒友だちの励ましは、次への意欲を高める。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてをつかむ ○学習の流れを知る。 ○話し手、聞き手のめあてを確認する。	◇話し方、聞き方のポイントを板書します。
2、「夏休みの思い出」発表会をする 【発表】 わたしは、山形と天童の花笠祭りで踊ったことが、心に残っています。花笠祭りに向けて、春から藤間流の踊りを何度も練習しました。 花笠祭りの日は、きれいな着物を着せてもらって、自分で化粧もしました。だんだんと体に力が入ってくるのがわかりました。足が苦しくなったり、腰が痛くなったりしけど、3時間ががんばりました。 たくさんのお客さんが拍手してくれたことが今も心に残っています。 【感想】 ・自分で化粧したなんてすごいなあ。 ・いっぱい練習したんだね。 ・そんなに踊って疲れないのかな。 ・今度わたしもやってみたいなあ。 ・たくさんの人の前ではずかしくなかったの。	◇ビデオプロジェクターを使って写真をテレビに映し、発表の内容がわかりやすいようにしていきます。 ◇発表に合わせて、グループの友だちが写真を映してくれます。
	◇友だちの感想から自分の発表を振り返ります。
	◇友だちの感想を聞きながら、自分の感想を明らかにしていきます。
3、メッセージカードを書く ○友だちの発表の良かったところ、工夫したところを見つけて書く。	◇学級内に支持的雰囲気が形成されます。 ・友だちのがんばりに対して目向け、みんなで認め励ましていきます。 ・自分自身の長所にも目向け、自信をもっていきます。
A子さんは、発表の仕方がとても上手になったと思います。グループで練習したときは、声が小さくて、話し方もはやかったのに、今日はとても堂々としていてすごいなあと思いました。	一人ひとりが発表会へ向けてがんばったこと、友だちへの暖かい言葉がけができたことを認めます。
○メッセージカードを読む。 ○先生の話聞く。	

広げよう! 読書の輪、友だちの和

1 ねらい

- (1) 自分の読んだ本を紹介し合うことにより、友だちと共に読書の世界を広げていく楽しさを味わわせる。
- (2) 物語の主人公を紹介するカードを作ることを通して、読書への意欲を高め、いろいろな物語を読もうとする態度を育てる。

2 指導の着眼点

- (1) 身近な友だちを通した本紹介
この時期の子どもたちは、他に対して目を向け始め、交友関係に広がりを見せていきます。友だちからの影響も大きく、あまり本を読まなかった子も、「この本の〇〇が面白いよ。」などという友だちからの紹介によって、読書の世界が広がり、さらには友だちの和の広がりにつながっていきます。

⇒友だちからの読書の広がり大切にしています。

- (2) 共有する世界を持つ

友だちと同じ本や同じ主人公のシリーズを読むことにより、同じ世界を共有する喜びを味わうことができます。自分と友だちの世界がさらに近くなってきます。

⇒物語の世界を探索する楽しさを友だちと味わっていきます。



3 展開の工夫

- (1) 事前の手だて

①紹介カード作りをする

○友だちに紹介したい本を選ぶ。

○あらすじをつかむ。

○主人公の性格やエピソードを読みとる。

⇒物語のおもしろさを友だちを意識して読み進めていきます。

○「見つけた! とびっきりの〇〇」の主人公紹介カードを書く。

⇒わかりやすく紹介しようと意欲が高まります。

- (2) 事中の手だて

①友だちと交流をする

○掲示された紹介カードを読む。

○読んでみたい本を見つける。

⇒友だちの紹介によって、読んでみようという意識がわきます。

- (3) 事後の手だて

①読書の広がり

○全員の紹介カードを『きみにおすすめの一冊』の冊子にして配る。

⇒一人ひとりの思いを大切に伝える。

○友だちが紹介してくれた本を読む。

○紹介カードの「ちょっとペンをとってね」のコーナーに一言感想を記入していく。

⇒読んだ人と紹介してくれた人の交流をはかります。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてをつかむ 【全体（一斉）】 ○学習の流れを知る。	◇掲示コーナーを設け、紹介カードを掲示しておきます。
2、紹介カードを読む 【個別活動】 ○掲示されている紹介カードを、自由に読む。	◇友だちの紹介カードを読んで、自分に合った本を捜していきます。
《Aさんのカード》 題名『オバケちゃんとおこりんぼママ』 作者（松谷みよ子） オバケちゃんはママおばけから「くものすあつめて、糸をまいときなさい。」っていわれて、くものすをまいていたんだけど、とちゅうでいやになって森の外へ行ってしまいました。 わたしは、ママのいうことをきかないでいってしまうなんて、いけないと思いました。	《Bさんのカード》 題名『ノアのはこぶね』 作者（レーシー・カズンズ） ノアはえらいと思いました。神様を信じているし、神様がノアにつけたことを本当にしたからです。ふつうの人間は、すぐあきらめるけど、ノアはあきらめないところが、ぼくはすごいと思います。 おもしろい話なので、読んでください。
3、感想を発表する 【発表（グループ）】 ○グループごとに感じたことを話し合う。	◇自分や友だちのがんばったところ、よかったところをみんなで認め合います。
・みんなおもしろそうにまとめたね。 ・〇〇さんの紹介カードを見て、読んでみようと思った。 ・ぼくのカードを読んでくれて、「この本、貸して」と言ってくれたので、うれしかった。	◇友だちと考えを交流することにより、さらに自分の考えを深めたり広げたりしていきます。
○先生の話聞く。	◇一人ひとりの努力を認め、読書の広がりにつながるよう、意欲付けをしています。

私たちの調べたことを、よく聞いてよね

1 ねらい

- (1) 日常生活の中で問題意識をもち、積極的な探求心と自主的に解決する能力を育てる。
- (2) 知り得た事柄を発表し、情報の社会に果たす役割について学び合えるようにする。

2 指導の着眼点

- (1) 多くの情報にチャレンジ
日常生活の情報（バーコードの意味）に興味と関心をもち、探求する意欲を持たせる。
⇒情報は現代社会の象徴である。
- (2) 仲間意識は協同から
同じ問題意識をもつ仲間同士が協力して課題を解決する。
⇒協同することは社会生活を営む上での常識である。
- (3) 発表の上手は聞き手も上手
聞き手をひき付ける発表の工夫は、課題意識を明確に自分のものにしていることが必要である。
⇒説得力ある自己主張は相手の意見をよく聞くことである。



※本校では、マイブランチタイムとして自由裁量の時間を知的探求に使っている。

3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

教師のオリエンテーションを受け、共通課題を「バーコードの秘密を探る」とする。

①バーコードの記号や数字に疑問をもつ

○買物を通してバーコードに出会う。

⇒疑問から自己課題が生まれる。

②同一課題を協力して調査する

○グループ毎に調査項目、方法、まとめ方を計画する。

・どうして値段が分かるのか ・バーの意味は何か ・数字の意味は何か
・どんな良いことがあるのか ・レジとの関係は

○分担し、調査してまとめる。

○図書室を利用して資料を集める。

⇒まとめ役（グループリーダー）が必要なこと、協力体制が重要。

(2) 事中の手だて （＊詳細は右頁の本時参照）

①バーコードの情報を持ち寄り、みんなの協力で理解する

(3) 事後の手だて

①芽生えた意欲、協同、探求心を大切にすると

○困難に立ち向かう意欲と集団の協力は今こそ重要である。

○教師主導も成長過渡期には必要である。

○疑問は発見につながり意欲を生む。

⇒個と集団を生かす教師の助言と支援が大切である。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時の活動のめあて確認 【司会（児童）】 ○はじめのあいさつ ○バーコードの秘密について発表会をしよう ○発表態度、聞く態度など活動内容の確認をする	◇子どもの運営で、調査結果を展示物を通して理解するように進行する。 ◇発表する、聞くという基本的態度の育成が担任の願いである。
2、バーコードの秘密について調査結果を発表し合う 【発表（グループ毎）】 ○バーコードの暗号の意味、数字の意味、バーの意味は何か 	◇発表の声の大きさに留意する。 ◇活動が最終目的（バーコードの社会的意味）から外れないように助言する。 ◇課題を明確に資料を提示する。
3、調査結果の発表を質問等を通して理解する 【発表に対する質問、意見（全体）】 (1)バーコードで品物の値段がどうしてわかるのか ・レジのところにあるポスレジスターが読み取っている。 (2)バーの意味は何か ・バーの太さや長さで数字を表している。 (3)数字の意味は何か ・国名、製造元、商品名を表している ・49は日本である (4)バーコードを使うとどんな良いことがあるのか ・ホストコンピューターに送信される ・ホストコンピューターから値段の情報をレジに返送される ・レジが速く簡単である ・商品の発注にも便利である	◇聞き手にも質問や感想の機会を与える。 ◇発表を深める教師の支援（バーコードには多くの暗号があるらしい） ◇バーコードのよさが理解できたか、教師の発問で確認する。
4、担任教師の話聞く 【まとめの話（全体）】 ○バーコードの情報のしくみを確認する。 ○商品以外でも使われている。（宅急便の宛名用紙など） ○活動を通して、個人や集団のよい面での変容が大きいことなど ○活動に対する評価をする。 ・発表態度や聞く態度 ・質問、意見などの積極性 ・グループ内の協力とまとめ ・課題探求の態度	

卒業までに何かをしたい

1 ねらい

- (1) 卒業までの奉仕活動とその過程を通し、一人ひとりの成長を確かめる。
 - (2) 活動を振り返り、互いのよさを認め合う。
 - (3) 主体的に参加し、協力する活動で学級の連帯感を高める。
- ### 2 指導の着眼点
- (1) 進んで公共のために奉仕する
本校はボランティア活動の盛んな地域環境にあり、地域に根ざした年間ボランティア活動を7項目上げている。

・清掃 ・花いっぱい運動 ・さわやか挨拶地域運動 ・助け合い、励まし親切運動 ・豊かな自然と環境作り運動など

- ⇒世のため、人のために行なう奉仕活動は、結局は自分の感性を豊かにすることである。
- (2) 長期にわたり、継続して奉仕活動をする
忍耐と努力の必要な奉仕活動は活力あるたくましい子どもを育む。
- ⇒社会の変化に対応するたくましさ、主体性は実践から生まれる。



- (3) 一人ひとりの協力は学級の連帯感を高める
上級生という意識をもたせることは、人生の一つの垣根を越える試練である。
- ⇒主体的な協働は団結心を育む。

3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

①認め合いの風土づくり

- 目的意識をもち、可能となる奉仕活動には何があるかアンケートをとる。
- アンケートの結果について話し合いの場を設定する。
- 卒業まで長期にわたって継続して行なう奉仕活動を考える。

⇒仲間の考えを聞くことは、自分の考えをまとめることでもある。

②各自がアイデアを出し全体でまとめる

- 終わりの会での「今日一日のいい話」は一人ひとりのアイデアを生むチャンスであり、仲間のよさを見出だす場面である。
- 卒業対策委員会を設置してアンケートの結果を検討して集約する。

⇒自分たちで実行することは意識高揚の原動力である。

(2) 事中の手だて（＊本時の活動参照）

①奉仕活動の具体的内容を検討し、自分の活動を決定する

⇒自己の意志決定までの他の意見、助言は重要である。

(3) 事後の手だて

①長期間継続し発展する奉仕活動の推進

- 仲間と協力、継続活動を支援する。
- ⇒教師の支援が「やる気」を起こさせる。

②実践後の感想を発表、相互評価を行う

- 「終りの会」等で発表会を行う。
- 次の活動への意欲化を図る。
- ⇒個々にわたる実践の見届けと具体的な助言指導が人生の過渡期を越える力となる。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1. 前時までを総括し、本時の活動を確認する 【担任の話（全体）】 ○卒業までを見通し、協力してできる活動を考える。 ○アンケート結果を卒業対策委員会が集約し提案する。	◇自分たちで考え検討した活動を実行しようとする意識をもたせる。 ◇ボランティア体験を多く積むことによって心豊かな人間を育成する。 ◇反対意見も取り上げ、発表の機会を設ける。
2. 「卒業奉仕活動」の意義について話し合う 【話し合い（全体）】 ○6年間学校の世話になった。 ○下級生がよりよく生活できるように。 ○卒業まで何かをしたい。	・空缶は捨てる人が悪い ・自分の利益にならない ・いい思い出が無い ・面倒だ ◇学校への感謝の心、下級生への思いやりの心を育てる。 ◇実行可能な具体例が出るよう担任も例示する。
3. 奉仕活動の具体的内容を話し合う 【話し合い（全体）】 ○ゴミ、空缶拾い。 ○特別教室、側溝の清掃やガラスみがき。 ○図書室の本の修理と整理。 ○下級生と遊ぶ。	 ◇長期にわたり、継続して活動出来るよう助言する。
4. 自分の活動内容を決定し、発表する 【発表】 ○奉仕活動カードに自己決定内容を書き、発表する。 ○効果ある活動になるよう約束事を決める。	
5. 奉仕活動の実践に向けて 【担任の話（全体）】 ○目的意識をもって長期、継続する奉仕活動である。	奉仕活動終ったの感想 ・奉仕活動をすると心もピカピカになります。 ・トイレ掃除は逃げ出したいくらい嫌だった。でも最後までやり遂げ、終わったあとはとてもすがすがしかった。 ・一生懸命やったのでとても気持ちよかった。 ・「私達が一番よく働いた」とどの班も思っている。 ・とても疲れたけどいい気持ちです。 ・みんな、まとまってできたと思う。今日は楽しかった。またやりたいと思う。 「やってよかった」という笑顔が浮かぶ感想でした。



全員が主役！ぼくらの運動会

1 ねらい

- (1) 一人ひとりの役割を明確にすることにより、各自が存在感を感じながら意欲を持って主体的に活動に取り組めるようにする。
- (2) 運動会に向けての様々な活動を通して、協力し合って仕事をする事の大切さと喜びを持つ。

2 指導の着眼点

- (1) 各学級での話し合いを大切にすること
楽しい運動会にするためにどのような取り組みをするのか、学級で十分に話し合います。話し合われたことを学年の実行委員会で検討します。決定したことを学級に持ち帰り、具体的な準備作業に入ります。
⇒取り組みの内容や方法に一人ひとりが納得して、意欲的に活動に取り組めます。
- (2) 協力し合うことの素晴らしさを知る
人にはそれぞれ得意不得意があることや考えが違うことを認めながら、お互いに助け合い協力しながら作業を進めます。その中で、一人ひとりが大切な仲間であることを感じ取っていくことができます。
⇒一人ではできないこともみんなの力を合わせることで、すごいことができることを実感していきます。



3 展開の工夫

⇒ 事前の手だて

①学級で運動会の取り組みについて話し合う

○運動会のめあて・応援の方法・学年の種目などについて話し合う。

⇒全員で取り組む運動会であることを意識させる。

②学年実行委員会を開く

○実行委員が各学級から出された案を検討し決定します。

⇒各学級から出された案を尊重しながら、実行可能なものにまとめる。

③実行委員会で決めたことを学級で検討

○実行委員会でまとめた案について学級で話し合う。

⇒よりよいものにするために納得がいくまで話し合わせる。

④最終案を実行委員会でまとめる

○学級から出された修正案を検討し、決定する。

⇒学級と学年実行委員会を繰り返し行うことでみんなでつくる運動会であることを強く意識させる。

(2)事中の手だて（＊詳細は右頁の本時参照）

⇒決定したことに従って、各グループの自主性を尊重する。

⇒事後の手だて

①取り組みについて各学級で反省をする

②実行委員会で全体の反省をする

③運動会の取り組みをサッカー大会に生かす

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてを確認する 【全体】 ○開会の言葉 ○学年実行委員会の報告 ○本時のめあてと活動順序を知る。 ●最終決定した取り組みの内容 ・お家の人への招待状作成 ・応援旗の作成 ・プログラムの作成	◇本実践の特徴は、「運動会」という行事を学年としての取り組みを計画から実行まで子どもの手によって行うということです。話し合いや活動を通して、教え合い、励まし合い協力し合うことで信頼感が深まり新たな人間関係を築いていきます。
2、議題「役割分担をしよう」 【話し合い（組毎）】 ○招待状・応援旗・プログラムを作る役割を決める。紅白の各組の中で3つのグループに分かれます。	 ◇話し合いによって決まった役割に従って作業を進めます。グループの中で教え合ったり、助け合ったりしながら作業ができるよう声がけをします。
3、各グループで作業をする 【活動（グループ毎）】 ○協力しながら作業をする。	 ◇反省は次の活動に生かされます。 ◇悪かったことよりも、まじめに取り組んだ人のことや協力してできたことなどを出させます。
4、今日の活動について反省をする 【話し合い（グループ）】 ○一人ひとりが反省を発表します。	(例) ・Aさんがおばあちゃんに書いた招待状、とても心のこもったものでした。Aさんにとっておばあちゃんはとても大切な人なんだなと思いました。(K) ・応援旗のデザインを考えたときBさんがすばらしいアイディアを出してくれました。Bさんがあんなセンスを持っているなんておどろきました。(R)
5、今日の活動について感想を発表する 【発表（全体）】 ○各グループから一人ずつ発表する。-----→ ○先生の話聞く。	今日の活動では、みんなが真剣に取り組んでいました。とてもうれしかったよ。みんなの力を合わせてすばらしい運動会にしよう。

自分を知り、友を知る

1 ねらい

自分自身のよさに気づいたり、友だちのよさを知ったりする場を日常生活の中に設定することで、望ましい人間関係を築く。

2 指導の着眼点

- (1) 構成的グループ・エンカウターの導入
希薄な人間関係を改善するためには、まず、お互いのよさを認め合うような雰囲気作りが必要です。そこで、人間相互理解の方法である構成的グループ・エンカウターを取り入れ自分を見つめたり、友だちを受け入れたりして、学級内の信頼関係を深めていきます。
⇒自分の個性に気づき、他者の個性を知ることです。

(2) 協力して活動することの喜び

「明日、また学校に来よう。」という気持ちを持たせるためには、日常生活の中で継続して活動する場が必要です。朝の会・帰りの会の時間に、班活動の場面を多く設定することで、各班が責任を持ち協力し合って活動できるようにします。

⇒班の活動を通して「自分」を見つめ、他者を理解していきます。



3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

① アンケート調査

○自分の性格や趣味などについて書く。

⇒自分自身を見つめなおすことにより、自分を再確認する。

② 班長会による朝の会・帰りの会の計画

○朝の会・帰りの会の持ち方や流れについて原案を立てる。

○ゲームの内容などねらいに合ったものになるようにアドバイスをする。

⇒班長会の考えを尊重する。その分責任を持たせる。

③ 班の中での話し合い

○担当班で朝の会・帰りの会の進め方について話し合う。

⇒班長を中心にして係を分担させる。

(2) 事中の手だて（＊詳細は右頁の本事参照）

⇒できるだけ子どもに運営させる。

(3) 事後の手だて

① 朝の会・帰りの会の反省をする

○学級活動で反省を出し合い、内容について再検討する。

⇒自分の意見を主張するだけでなく他者の意見にも耳を傾ける態度を育てる。

② 人間関係について調査する

○子ども同士の人間関係をみるため質問紙法による調査をする。

○問題が出てきた場合には、学級活動で話し合いを持つ。

⇒子どもがよい方向に変化していく様子を見ることは教師の喜びです。

4 展開例

活動の流れ	活動のポイント
朝の会 1、元気に朝のあいさつをする ○朝のあいさつと開会の言葉 2、朝の歌と健康観察をする 3、クイズ「私は誰でしょう」 【発表（全体）】 ○当番がある人の性格や趣味などを1つずつ紹介する。最後に誰のことを当てる。（M君の例） 好きな食物はカレーです ・好きなスポーツはバスケです。 好きな動物はチーターです。 ・長所は人を楽しませることです。 趣味はミニ四駆です。 ○感想を発表する。 感じたこと、気づいたことを発表することで振り返り（シェアリング）をします。-----> 4、今日のめあてを確認する（先生の話） ○めあての達成の方法を考えさせる。	◇担当班の子どもたちに進行させ、みんなで進めるという意識を持たせます。 ◇体調のすぐれない子どもに対しては、原因を探るなどの声がけをし安心感を持たせます。 ◇子ども一人ひとりの個性を引き出しそのよさを学級の児童全員に理解させるようにしていきます。 ◇シェアリングとは分かち合うことです。互いに感じたことや考えたことを分かち合うのです。 ---M君についての感想--- ・ぼくもミニ四駆が好きなので今度一緒に遊んでほしい。 ・いつもおもしろいことをやっているのは周りの人を楽しませるためだったんですね。
帰りの会 1、一日を振り返り反省をする 【話し合い（班毎）】 ○頑張ったことやうまくいかなかったことを班内で話し合う。 【発表（全体）】 ○班で話し合ったことの中で学級全体に知らせたいことや考えたいことを発表する。 2、楽しいゲームをしよう 【全体】 ○班対抗のゲームをする。 ゲームは班担当で考えます。 （例 グループじゃんけん・輪ゴム送り・伝言ゲームなど） ○ゲームの感想発表をする。 3、今日の反省を明日につなぐ（先生の話） ○先生の話聞く。 ○帰りのあいさつをする。	◇学校や学級のためになるようなよい行いをした子どもや頑張った子どもに拍手を送ります。 ◇諸連絡だけでなく、今日一日を振り返りよかった点をほめ、明日も頑張ろうという意欲を持たせる。

みんながもってる すてきな一面

1 ねらい

- (1) 帰りの会や日記などの継続的な指導、学校行事への取り組みを通して、一人一人のよさを認め合う心を育てる。
- (2) 新聞づくりを通して、人間的なふれ合いを深めるとともに、生き生きとした明るい学校生活が築かれていくようにする。

2 指導の着眼点

(1) 友だちを知る

友だちの親切や善行について考えてみると、見えないところで実行している場合が多いものです。ぼんやりとしか見えていなかった友だちを見る視点を明確にする必要があります。

⇒よい点を見つけることは認め合うこと。

(2) ともに学び合う活動の重視

班毎の新聞づくりや発表会・審査会は、一人ひとりの活動の場が保証されるような配慮がされています。友だちから学び、友だちとともにやり遂げることが、新たな活動の原動力となります。

⇒共感的人間関係を大切にしていきます。

3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

①帰りの会での発表

○毎日の帰りの会へ「友だちの親切、いいところ、うれしかったこと」の発表を位置づける。

A：Y君は、1年生の給食を運ぶのを手伝ってくれました。

B：UさんはR君に消しゴムをかしてくれました。

⇒友だちのよさを見つける視点を育てる！



②日記での「お話づくり」

○「したこと」の羅列から「自分なりの考え」を書きとめる。

A：みんなそれぞれ得意じゃないことはあるけど、一生懸命努力すれば、できないことはないんだなと思いました。

⇒友だちのよさを通して、自分のよさについて考える。

③学校行事への取り組みの記録

○自分のがんばりだけでなく、友だちのがんばりを見つける。

A：D君は、練習で25m泳げなかったのが、泳げるようになったので、すごいと思いました。

⇒努力の過程は、みんなが見守ってくれる。

(2) 事中の手だて（＊詳細は右頁の本時参照）

⇒お互いのよさを認め合うことが、新たな活動の意欲に！

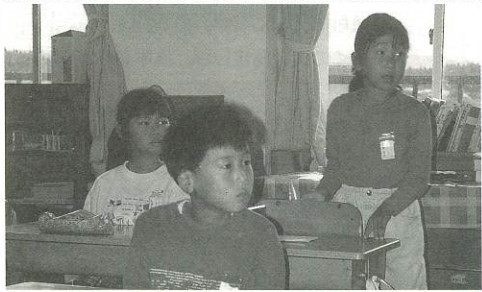
(3) 事後の手だて

①感想をまとめる → 日記指導へ

②職員室前廊下へ新聞を掲示

⇒発達段階に応じて、善行・親切の内容のグレードアップを図る。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてと活動の順序を知る 【発表（全体）】 ○はじめの言葉、歌。 ○議題の確認と議題を出したわけを知る。 この新聞は3年1組の友だちのよさや親切、うれしかったことを紹介し、お互い認め合うためにつくってきたものです。発表会をして、学級みんなで審査し、これからの学級づくりに生かしていきましょう。	◇本時の進め方については、あらかじめ教室に掲示されています。 ◇本時までの経過とめあてを先生が簡単に説明します。
2、各班の新聞の発表会をする 【発表（班毎に）】 ○トップ記事を中心に工夫したこと、苦労したことを発表する。 ・わたしたちの班は、見えないところでがんばっている人のことを記事にしました。	 ◇「児童一人ひとりに活躍の場を保証したい」という担任の願いがよく表れている場面です。 ・班員の一人ひとりが役割を持って発表を行っています。
3、新聞のよい点について話し合い、審査会をする 【話し合い（全体）】 ○各班の新聞のよい点について発表し合う。 ・A君が夏休み中に、学級のサツマイモに水をかけていたという記事がよかったと思います。 ・C班の記事は、泳げるようになったときの気持ちが書いてあるのでいいと思います。 ・B班の新聞は、色の使い方がとても上手できれいです。	◇本実践の最大の特徴は、「お互いのよさを認め合う」の場を大切にしたい、という担任の願いにあります。 ・なぜその新聞がよいと思ったのか、理由を明確にして話し合いが進んでいきます。 ・見た目の美しさだけでなく、記事の内容に関する意見も数多く出されていきます。
 【投票 → 開票 → 表彰】 ○各班から代表を出し賞状を準備しておく。	◇児童の希望により、投票での審査会を行います。 ・班のみんなで相談して書いた新聞が特賞になったのでうれしいです。
4、友だちの感想を聞く ○特賞に選ばれた班員は、感想発表をする。 ○先生の話聞く。	◇各班の努力の過程を具体的に話し、賞賛しています。

持久走、みんなで走れば……パワーアップ

1 ねらい

- (1) 困難であるとわかっていることに対して、学級みんなで励まし合い練習に取り組んでいくことから、困難を乗り越える精神的強さを育てる。
- (2) 持久走大会について話し合う活動を通して、自分の体力を試すチャンスという意欲を高め、大会に参加できるようにする。

2 指導の着眼点

- (1) 「一人で…」よりも「みんなで…」
事前の手だてとして、誰もが不安な気持ちでスタートし、「ゴールした後の爽快感」や「やり遂げた成就感」を味わっていることを確認しています。

⇒**友だちの存在を大切にしていきます。**

- (2) 集団の中で、自分を見つめ直す
本音が出せるような雰囲気づくりが随所に見られます。友だちの偽らざる気持ちにふれることで、自分の考えを見つめ直し、本当の自分が発見できるのです。

⇒「**人間的なふれあい**」を通して心を育てていきます。



3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

①がんばりカードで練習意欲を高める

○周回数を色分けし、練習の足跡を残す。

⇒特に苦手としている子への声かけ、励ましを忘れずに！

②自分を見つめ直し、目標を決める

○練習を振り返っての作文を書く。

⇒走る意欲や気持ちの変化を表現する。

○友だちの作文を読み合い、自分を見つめ直す。

⇒走るのがはい人にも困難や不安はある。

⇒苦しいのは自分だけではないことを知る。

○一人ひとりが目標を決める。

⇒他との比較ではなく、あくまでも自分自身の目標となるように！

③学級通信で家庭との連携を図る

○作文の中に見られる印象的な文章を、学級通信で父母にも紹介する。

⇒多くの人の励ましが、挑戦意欲を高める。

(2) 事中の手だて（＊詳細は右頁の本時参照）

⇒大会前の雰囲気づくり

⇒大会の意義を子どもたちが見いだしている場の設定。

(3) 事後の手だて

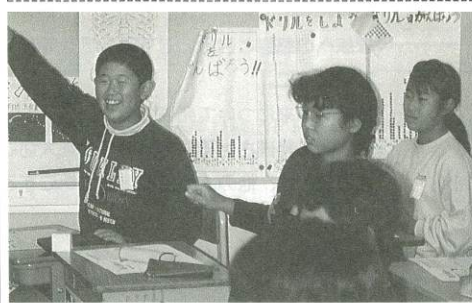
①大会の結果をみんなで認め合う

○前大会からの記録の伸びを学級通信で報せる。

○大会後の感想を学級通信で父母に報せる。

⇒こうした手だてを通して困難を乗り越える力が身についていく。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、持久走大会を前にした気持ちを発表し合う 【発表（全体）】 先生の司会で行います。 ・とてもいやな気持ちがある。 ・とても緊張している。 ・みんなからがんばると言われるとプレッシャーを感じる。 ・どうせ走らなければならないんだから、はやく走りたいと思う。 	◇発表された内容は、整理して板書されていきます。 ◇教師の意図的な指名と受容的な態度が、価値の違う様々な意見を導き出しています。 ◇本実践の最大の特徴は、子ども同士が「本音で発表し合う場」を演出しようという担任の願いにあります。 ・友だちの意見を聞くことで、自分の考えを見つめ直しています。 ・弱い自分と強い自分の存在に目を向けさせていきます。
2、持久走大会の意義について話し合う 【発表（全体）】 ・運動不足を解消し、体力をつけるため。 ・学校で苦しいことがあまりないから。 ・こういう行事がないと今の子どもはすぐ逃げるから。 ・自分の記録を試すため。 ・先生方が子どもたちに苦しい経験をさせたいから。	◇児童の様々な意見より、持久走大会の意義は、体方面、精神面の両方を高めることをねらっていることに気づかせていきます。
3、友だちの意見を参考に、自分の取り組み方について話し合う 【発表】 板書された友だちの意見を参考に、自分の考えを発表する。 ・どうせなら楽しんで走りたい。 ・やっぱり気が進まない。 ・今までは走った後に後悔してきたので、後悔しないように走りたい。 ・自分が頑張ったということを人に言えるように走りたい。	 ◇あくまでも子どもの意見を大切にしてい ◇いく教師の姿勢が、自己を見つめるための「友だちの存在」をより効果的にしています。
4、今の気持ちを作文にまとめ発表する 【作文】 授業の中で出された友だちの意見を参考に、今の自分の考えを作文にまとめる。 【発表】 ・積極的に臨もうとしている子 ・やはり、消極的な子 ・考えが変化してきた子 } 数名が作文を発表する。 ◇児童へ励まし言葉をおくって本時をまとめています。 児童から出されたマイナスの気持ちに共感しながら、プラスの思考ができるように励ましを与えています。 ◇先生の話聞く。	

積極的に行動できる自分をめざして

1 ねらい

- (1) 積極的に行動できるように、自分の力に対する自信を持たせる。
- (2) お互いに相手のよいところを認め合える姿勢を育てる。

2 指導の着眼点

- (1) 自分の能力への自信をもつ
「やりたいけれど勇気がない」「わかってるけど自分からはできない」という消極性を克服しようとするとき、自分の個性について考えることになります。
⇒自分自身をより深く理解していくことで、自分の能力に自信をもつことにつながります。
- (2) お互いの個性を認め合い、積極的に評価する。
人間は、短所だけでなく長所もたくさん持っている。その長所を友だちや教師がもっと評価していくことが大切です。
⇒自分がみんなから認められ、励まされ、また、「自分の知らない自分」を知ることによって、積極的な行動への意欲づけとなることあります。



3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

- ① わたしはだれ? 発表会 (7月)
○名前に込められた両親の思いについてまとめる。

⇒家族への感謝と自分に対する自信を呼び起こすように。

- 名前の由来について発表し合う。
- ⇒自主的に発表させる。自分の名前を大切にすることは、他の人の名前をも大切にすることにつながる。

② 少年自然の家での挑戦 (8月)

- 実行委員会を組織し、生徒が主体となって企画、運営する。
- ・野外炊飯 ・川遊び ・ボンファイアー
- ・チャレンジ20kmウォーキング
- ・ソロビパーク
- 保護者への参加よびかけ
- 記録文集の作成
- ⇒生徒の自主活動を尊重、責任ある態度、班活動、全体活動での協力を高める。十分な達成感が個人としての自信を生み、集団としてのまとまりにつながる。

(2) 事中の手だて〔*詳細は右頁の本時参照(9月)〕

⇒ありのままの自分を表現し合うことは、みんなの心を結びつけ、意欲を喚起する。

(3) 事後の手だて

① 文化祭にむけて (10月)

- 合唱コンクール、クラス展示への取り組み。
- ⇒それぞれの特技に合った作業分担となる。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてと発表の順序 【特技発表(全体)】 ○開会の言葉 ○プログラムカード〔I am No.1〕(自己PR)の配布と経過説明。 ○本時のめあてと活動の順序を知る。	◇生徒の多彩な発表に対応できるように、発表の場所は体育館になります。(用具は各自が準備する。) ◇生徒の負担や公平さを考え、本時の進行役は担任となった。一人ひとりのカードには、前もってコメントを入れ、ありのままの自分を発表できるように配慮した。
2、特技発表と積極的な相互評価 【発表(全体)】 ○カード順に一人ずつ自己PR(パフォーマンス)をする。 ○発表者以外は、一言感想をプログラムカードに記入する。	(A子の自己PR)…ソロバン2級をとれたことを自分でもうれしく思っているので、速さも、正確さも練習どおりがんばろうと思います。…
	
3、プログラムカードを回収、各人に配布 ○感想や他の生徒から見た自分の長所を読んで、自分を見直す。	◇「こんないいところもあるよ」をお互いに交流し合い、いっそう自分についての理解を深める。 ・自分も友だちも知っている自分 ・自分は知らないで友だちが知っている自分 ・自分は知っているが友だちは知らない自分 ・自分も友だちも知らない自分
4、感想発表 ○数人の代表が発表する。 (K男の発表)…みんなが書いてくれるのは、長距離かなと思っていました。実際に13人いました。これからもっと走って速くなりたいです。しかし、自分が思っていないこともありました。ハードルが速いとか、人のまねがうまいとかです。ありがとうございました。これからも練習していきたいと思います。…	◇「今度はこういうことをがんばりたい」「～してみたい」といった積極的な感想に変わってきた。
○先生の話聞く。	◇文化祭に向けての取り組み

みんなでつくろう新生徒会

1 ねらい

- (1) 企画委員、学級委員のリーダーとしての意識を高める。
- (2) 企画委員会、専門委員会等を見直すことによって、日常での実践を充実させる。
- (3) 各委員会の活動内容の見直しをする中で組織の統廃合を進める。

2 指導の着眼点

- (1) 生徒会活動のあり方について、課題意識をもつ。

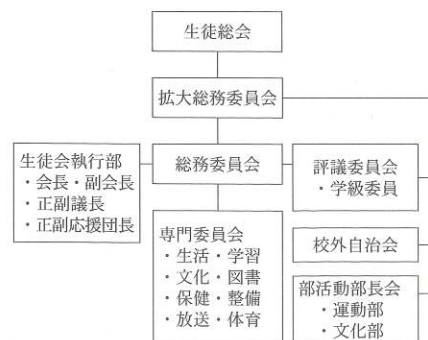
学校生活をよりよいものにしていくには、執行部を中心とする日常活動にも深いかかわりがあります。

⇒リーダーとしての自覚と改善への意欲が高められます。

- (2) 各委員会の情報交換を密にして、生徒会全体としてのあり方を考える。

活動の活性化には、生徒の考え方、各委員会の機能の変化など多面的な視点から考察してみることが大切です。

⇒生活の向上を図り、よりよい校風の樹立にむけて、生徒会活動の方向性を確立することにつながります。



3 展開の工夫

(1) 活動の経緯

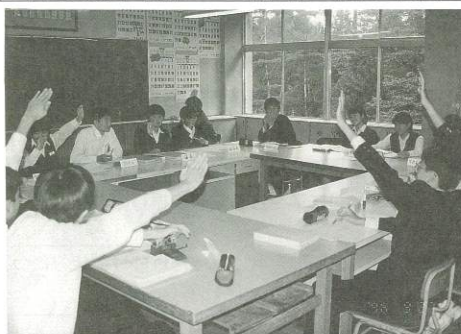
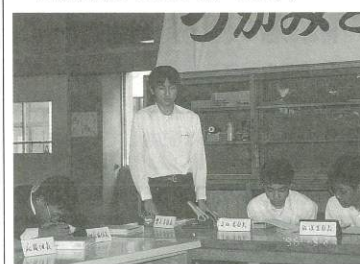
3月下旬	リーダー研修会（専門委員会の改編について決議）
8月上旬	改編委員会の構成を決定
下旬	改編委員会の活動予定を確認
9月中旬	第1回改編委員会
下旬	第2回改編委員会 〔詳細は右頁の本事参照〕
10月下旬	第3回改編委員会
11月上旬	中間発表（各学級、各教師の意見集約）
中旬	第4回、第5回改編委員会 （改編の原案作成）
下旬	後期生徒総会（承認）

(2) 改編の結果と今後の予定

- 専門委員会の数、活動内容の見直しから、大幅な組織の改編へと進展する。
- 改編された内容は次の後期生徒会より実施。
- 生徒会規約の改正を含めて、活動の充実を図る。

改正前	改正後
*選挙で選出される ・生徒会長1 ・副会長2 ・議長1・副議長1 ・応援団長1 ・副応援団長2 *生徒間の互選によって選出される ・各専門委員長8 - 生活 学習 図書 - 整備 放送 保健 - 体育 文化 ・学級委員長1	*選挙で選出される。 ・生徒会長1 ・生徒会副会長2 （議長を兼務） →1年-1、2年-1 ・応援団長1 ・各専門委員長4 - 生活 学習 - 広報 衛生 *生徒の互選によって選出される ・学級委員長1

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
○会場準備 ・座席（口の字型）とプレート配置 ・資料配布 1、本委員会のめあてと話し合いの順序を知る ○始めのあいさつ（司会進行） ○先生の話（担当教諭） ○経過と今日の内容説明（生徒会長） …我々の生徒会は、いろいろな仕事の関係で不都合な事が多く出てきています。もっと活発に活動できる生徒会をつくり出すためにも、各委員会の内容を見直して…また、これからの生徒数の変化を考えて委員会の数も見直して、良い方向に…。 2、各委員会の改編について話し合う（議長・書記）  ・これまでの提案も含め、新しいアイディアについて<質問、意見の例> ・広報委員会になぜ文化委員会が入ってくるのか。 ・学習委員会と図書委員会の仕事は違うのではないか。 ・学級委員会がなぜボランティアをするのか。 ・委員会の人数が増えたとさばる人が増えるのでは。 ・文化委員会から合唱をとらないでほしい。 ・衛生委員会に体育委員会を入れたらよい。 ・生徒会規約を改正する必要がある。 3、学級への提案について話し合う（決議） ○終りのあいさつ	◇生徒自身が進行・運営していきます。 ・改編委員会は各委員会代表17名で構成されています。 ◇本会議のねらいは、前回の内容を確認し、新しい提案に対する質問や意見を出しあうことになります。  ◇既成概念にとらわれなくて、生徒の自由な発想を大事に育てていきます。 ◇学校の実態については、生徒の求めに応じてできるだけ分かり易く説明し、理解を図っていきます。 ◇自分たちの力でよりよい生徒会づくりになるように支えていきます。  ◇意見が出つくした時期を見計らって、原案を作るために意見をまとめます。 ◇話し合った内容を1つに絞らないで、色々な考えを各学級に提案できるようにします。

WHAT?が拓くTHEY世界への旅

1 ねらい

- (1) 身近な職場を訪問することで働くことへの関心を深め、進路についての視野を広める。
- (2) 職業観を磨くために、訪問の目的や問題意識を明確にもたせる。
- (3) 社会的なルールや礼儀を身に付けさせる。
- (4) 生徒と保護者が共に進路を考えていくきっかけとする。

2 指導の着眼点

- (1) 保護者との関係を大切に
 学年通信や文書で次のことをお願いします。
 ○親子の話し合いのお願い(職業観について)
 ○職場紹介の依頼
 ○生徒の輸送依頼
 ○職場訪問発表会への案内
 進路指導は、常に生徒、保護者、学校の三者が一体となすすめるという考えから、
 ⇒保護者を活動に引き込んでいきます。

- (2) 指導の節々で目的意識を醸成していく。
 教師間の連携を綿密にとります。また、きめ細かな計画は概して生徒を受身にさせてしまうので、とりわけ配慮していきます。

⇒教師は、縁の下力持ちになります。



3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

① 職業調べ～発表会(9月上旬)の実施

- 身近な人の職業観を聞く。(夏季休業中)
- 各職場の概要をつかむとともに、訪問時に明らかにしたいことをつかむ。

⇒導入時における意識付けを大切に。

② 訪問する職場の決定(9月中～下旬)

- 訪問したい職種の調査(アンケート1)
 (26業種の中から3つを選ぶ)
- ⇒生徒の希望を考慮して事業所に依頼し、訪問する事業所を決めていく。

- (保護者の紹介もあって22の事業所が受諾)
- 訪問したい職場の調査(アンケート2)
 (訪問したい職場を選択する。)

⇒業種のバランスと希望結果をもとにして各学級に7～8事業所を振り分ける。

③ 訪問の意義に沿った班分けの仕方について話し合う。(10月上旬)

(※詳細は右頁の本時の展開参照)

④ 職場訪問資料を作成する。(10月下旬)

- 訪問時の約束、役割分担、質問事項等

⑤ 事前準備をする。(11月上旬)

- リハーサルを通して事の重大性を学ぶ。

(2) 事後の手だて

① 職場訪問をまとめる(11月中～下旬)

- 各職場に礼状を送る。
- 保護者を招き、発表会を行う。
- 職場訪問文集をまとめる。
- ⇒進路に対する考え方の変容が自覚されていくように配慮していく。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてと活動の順序を知る 【発表(全体)】 ○開会の言葉 ○議題提案 ○本時のめあてを知る。	◇生徒自身に運営させます。 ◇親の職業について半数が説明できなかった現状を意識させます。
2、議題1「職場訪問の目的について」 【話し合い(全体)】 ○主な意見として ・職場訪問の目的 ・「」の目標 ・目的に沿った班の決め方 ・自分のやりたい職業が見つかるように…。 ・今流行のフリーターとの違いをこの目で…。 ・働いている人の仕事ぶりに感じてくる。 ↓ 将来役立つように、職場から自分なりに何かをつかむために	◇2年の職業理解、3年の職業観の形成をめざし、1年では自己理解の必要性を意識させていきます。 ◇一応全体の目的としてまとめますが、何よりも個々の意識を多様に引き出すことに心がけます。
3、議題2「職場訪問の目標について」 【話し合い(班毎)】	◇目的をさらに行動化させた目標を考えさせることで自分のものにさせていきます。
	→○各班の意見発表後、全体の話し合いでまとめる。 ↓ ただ見て質問するだけでなく、一緒に仕事をするなど、積極的に取り組もう。
4、議題3「班の決め方について」 【話し合い(全体)】	◇目的と目標を強く意識させてきたことで、仲の良い者同士にはなりません。
・「やっぱり見たい所を見たい…。」 ・「でも人数多いとブラブラだよ。」 ・「第二希望まで出す。第一希望を尊重しながらも、多くなったところは、第二希望で調整する。」	◇希望通りいかない人が質問依頼できるように助言します。

- *そして、職場訪問発表会が実施され、こんな感想がありました。
- ・行きたくても行けない職場や興味を持っていた職場の仕事内容を聞くことができてよかった。
 - ・自分が将来何になりたいのか、前よりもずうっと考えるようになりました。
 - ・自分のつきたい職業はまだ見えません。でも、働くことのすばらしさはわかったつもりです。
 - ・質問を考えたり大変だった。通信簿配布の日、このまとめを見て、母ちゃん俺を見直してくれるかな。

もう一人の自分を友が見てくれている

1 ねらい

- (1) 自己理解の土台を体得させ、自己伸長への意欲を高めさせる。
- (2) 集団活動の中で考えを深め、お互いを理解し合い、向上し合える雰囲気をつくらせる。

2 指導の着眼点

(1) 自分を知る

「先輩の話聞く会」や「職場訪問・職場実習」などが、進路を考えさせる際の手段として導入されています。これらをさらに有効に機能させていくために、指導の基盤に据えなければならないことがあります。

⇒自分の適性を知り、伸ばしていくことです。

(2) 友だちを通して自分を見る

自分では長所と思っていることが他人には迷惑であったり、自分で短所と思い込んでいることが周りを和ませていたりという例がよくあります。鏡には映らない自分が、友だちを通して見えてくるということがあるのです。

⇒交流活動を通して「自分」を再発見していきます。



3 展開の工夫

(1) 事前の手だて

① 自己チェック表の作成

○自分の長所と短所を見つめ、書く。
(行動性格15、学習5項目)

⇒長所と短所は表裏一体であること、あくまで、自分を自分で評価するように。

② 班長会による集計と項目の分担

○自己チェック表を集計し、統計を取り、その活用法を考える。

⇒班長会の考えに委ねる。(受身にしない。)

○短所を5つ選び、話し合うことに決定。

A:時々、人の悪口を言ってしまう。

B:時々、きまりや約束を破ってしまう。

C:始業のチャイムで着席できず、…。

D:人の話を真剣に聞いていない時がある。

E:わかっていても手をあげないことが多い。

③ 「仲間への手紙」を書く

○班毎に、自己チェック表を回覧する。

○班員一人ひとりに宛てて手紙を書く。

⇒自分も相手から書いてもらっている。

相手が傷つかない応援のアドバイスを。

○教師が回収し、「仲間からの手紙」と題して個別にまとめる。

(2) 事中の手だて (*詳細は右頁の本時参照)

⇒可能な限り生徒自身に運営を委ねる。

(3) 事後の手だて

① 作文を冊子にまとめ、読み合う

② 本人許可の上、学級通信に紹介する

⇒こうすることが可能な人間関係を作っていききたい。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてと活動の順序を知る 【発表 (全体)】 ○開会の言葉 ○議題提案と経過説明・自己チェック表の結果発表 ○本時のめあてと活動の順序を知る。	◇生徒自身が運営していきます。 調査結果は、OHPを使ってわかりやすく提示されます。 
2、議題「短所を長所に変えていくために」 【話し合い (班毎)】 ○3班は、Aの話題に取り組み、次のような結論を得る。 「悪口を言わないようにするため」に、遠回しに短所に気付かせていく。その際、自分に当てはめて考えたり、相手の気持ちを考えることがたいせつ。 【発表 (全体)】 ○各課題について、各班の話し合いの結果を聞く。	◇本実践の最大の特徴は、生徒同士の「真摯な向き合い」を演出していく担任の願いにあります。 ・男女間にも日常的な会話が成り立っています。 ・「言う」裏に、常に「責任」への意識が働いています。 --M子さんへK男より-- 時々、人をにらむのはやめよう。あと、人の悪口も。もっと人のよさを見つけて友情の輪を広げていったなら、君はもっとすばらしい人になれる。君がだれかをにらんでいる姿をみると、ぼくはかなしくなる。だから、その笑顔を忘れずに。 ◇話し合いの結果・自己チェック表 仲間からの手紙が作文に機能していきます。 ・友だちからどう思われているかわかった。でも、自分に自身がついた。(K) ・みんなが真剣に考えてくれたことがうれしい。(E) ◇簡潔に生徒を讃えています。 ・仲間への手紙、大変だったろう。温かい手紙だった。2-1のいい所だと思う。
3、自分の実践事項を決めて、作文を書く 【自己内対話】 ○仲間からの手紙を読む。(沈黙と多面相が走る)  ○作文「自分を伸ばす努力点」を書く。 「…悪口を言うことはわるいことだよと書いてくれた友だち、そして、悪口はわるいが互いに長所短所を見つけれられていいことだと言ってくれた友だち。今、互いに理解し合うことの大切を感じている。…」 (A)	
4、友だちの作文を聞く 【発表 (全体)】 ○数人の代表が発表する。 ○先生の話を書く。	

感性は自分の生き方を見つめる

1 ねらい

- (1) 自然を愛護し、情操を豊かにさせると共に作物を育て、収穫することを通してお互いの共感を育てる。
- (2) 一人ひとりに満足感と充実感を満喫させ、大地（自然）への感謝と生きる力を養う。

2 指導の着眼点

- (1) 人を思いやる心・自然を愛する心をプランターを使って草花を育てたり、畑を利用して作物（じゃがいも、大根）を栽培することを通して土に触れることは、自然を愛する心を育てる大切な第一歩となる。

⇒小さな生命を大切にすることが一層育っていくのです。

- (2) 連帯感・大地への感謝を持つ

草花や作物をグループごとや学年全体で育てることは、連帯感が深まる。又収穫の喜びから湧きでる感動を生活の創造に拡げる。

⇒栽培や収穫を通して自己の豊かな生き方に気づきはじめます。



3 展開の工夫

- (1) 事前の手だて

① 花いっぱい運動（5月～10月）

○草花栽培の目的や栽培方法についての確認と企画

⇒学校が明るくなることや小さな生命力のすばらしさの体験につながる。

A：花の生命力の強さを学んだ。

② じゃがいも栽培（5月～8月）

○園芸係を組織し、じゃがいも栽培、管理収穫までの企画

・植えつけ ・世話 ・収穫 ・調理

⇒栽培活動を通して、連帯感が深まり自然愛が育つ。

B：作物を育てることで、自分も成長したような気がする。

③ 大根栽培（8月末～10月）

○園芸係を中心に大根の栽培の企画

・種まき ・除草と間引き ・消毒 ・収穫

⇒小さな生命力を育てることの大切さ、楽しさ、喜びなどを通して、身をもって感じる事が「感性」に向かって走り出しているのです。

C：小さな種が太い大根になるなんて、自然はすばらしい。

- (2) 事中の手だて（＊詳細は右頁の本時参照）

⇒活動を通して、学年全体の連帯感を深める。

自然栽培を通して、「人を思いやる心」や「自然を愛する気持ち」が育つのです。

- (3) 事後の手だて

① 自然栽培の記録・感想を冊子にまとめ読み合う

② 活動の様子を校内研修だよりで紹介する

⇒お互いの感性を共感できる人間関係を作る。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてと作業の内容 【発表（全体）】 ○開会の言葉 ・学年運営委員長 ・学年主任の先生 ○本時のめあてと作業の内容を知る。  （「耕せ畑!! たがやす心!」の話がこだまする）	◇学年運営委員長が中心に進行していきます。 ◇学年委員長から今までの自然栽培について具体的な話 ・これから小さな命を育て植物の成長の喜びを味わう。 ・除草を積極的にやることによりやさしい心を持つ。 ◇自然栽培について実態調査結果からと各担任の願い ・自然栽培を行なってよかった82% ・作物の栽培については90%がよかった。 ・学年全体の連帯感を深める。 ・畑の中で耕されていく生徒の心。
2、『畑の除草、感性への序奏』をめざしての作業 【作業（班ごと・全体）】 	◇除草に真剣に取り組む生徒たちの心に描いている思い ・作物が育ち、収穫できた時の感動は。 ・作物を育てることで、自分の心の成長は。 ・大根を育て、収穫することで自然愛が芽生える。 
3、作業後の感想発表と講評 【発表（全体）】 ○各クラスの代表が発表 ・一生けんめい除草したので、収穫が楽しみだ。 ・これから小さな命を育て、大根の成長の喜びを味わっていきたい。 ・大根を栽培して勉強になった。農業が好きになった。 ・みんな協力して除草したので、大変よかった。 ○先生の話聞く	◇生徒たちを高く評価しています。 ・「君たちと先生と一緒に『感性』に向って走りだすことができた。これは君たちに学ばせてもらったからだ。」 ◇収穫に向けての取り組み

平和な未来を築くために

1 ねらい

- (1) 「生命」を大切にすることとはどんなことなのか、文化祭の場でさらに生命について考えを深める。
- (2) 一つの行動をやり遂げた感動や成就感を味わい、協力することの大切さを知る。
- (3) 学年学級の取り組みを通して、自主性、自治能力、団結力を高めることができる。

2 指導の着眼点

- (1) 文化祭に向けての取り組みの充実
花づくりを通して小さな生命を大切にしたことによって感動や成就感を共有したことや協力することの大切さを生かし、文化祭に取り組むことが重要になります。
⇒互いの感性を共感させて、豊かに生き抜く感性の発展につながります。

- (2) 文化祭の場で生命についての考えを深化する。

文化祭の持つ意味や意義を十分理解し、学年のサブテーマ「平和な未来を築こう」のもとに取り組んでいきます。これを発表することは、文化祭のテーマ「生命」につながっているのです。

⇒生涯に渡って互いの人格を尊重し、自己の豊かな生き方を模索できる人間に育っていくのです。

3 展開の工夫

- (1) 事前の手だて

①文化祭の持つ意味、意義の理解

○「文化の日」の意味を考える。

- ・自由と平和を愛し、文化を進める日
- ・「文化」について ・「平和」について
- 文化祭のテーマ「生命」について
- 2学年サブテーマ「平和な未来を築こう」
- ⇒文化祭の取り組みへの意欲につながる。

②各クラスの取り組み

- 各クラスの実行委員が中心となって企画運営する。
- ・1組～いじめ劇（ビデオ）
- ・2組～ボランティア活動のスライド
- ・3組～環境問題の劇 ・4組～戦争の悲しみ
- ⇒生徒の自主活動を尊重することによって、主体性が高まり、協力することの大切さを体で受けとめることは、授業では学べない知識や技能が身につく。

③学年での取り組み

- 実行委員を組織し、企画、運営する。
- ・群読「生きる」 ・合唱「思い出は空に」
- ⇒自主活動を行なわせるには、適切な教師の声かけが大切となる。

- (2) 事中の手だて（＊詳細は右頁の本時参照）

⇒可能な限り生徒自身に運営させる。

- (3) 事後の手だて

①文化祭での発表

②一人ひとりが文化祭の感想を書きまとめる

③来年度の文化祭につなぐ（課題）

⇒生命の尊さを考えると同時に自分たちの人生に結びつけて考えることが大切。

4 本時の展開

活動の流れ	活動のポイント
1、本時のめあてと練習の順序 【発表（全体）】 ○開会の言葉 ○本時のめあてと練習の順序を知る。	◇生徒自身が運営していきます。 ・合唱も群読も全員が集中して練習に励む。 ・文化祭の本番に向けて、みんな心を合わせて一人一人頑張ってもらいたいという願いがこめられています。
2、合唱練習（内容と目標を含めて） 【練習（全体・パート）】 ○「思い出は空に」の全員合唱 ○パートごとの練習 男子 アルト ソプラノ → 全員合唱 ○アドバイスと講評	◇指揮者・伴奏者からのアドバイス ・声量 ・発音 ・自信 ・励まし ◇プラス思考の講評をしていきます。 ・教師と生徒の信頼関係を生み出している。 ・自信は、自分を見つめたり、自分が好きになる活動に生まれ変わる。 ・教師と生徒の心の漂流につながる。
	◇群読練習の内容と目標の確認します。 内容→群読の役割とタイミング 目標→群読のことは覚える
3、群読練習（内容と目標を含めて） 【練習（全体・部分）】 ○「生きる」（谷川俊太郎作）を群読する。 ○部分練習をする。 一連～五連	◇詩の内容を自分のものにするために、一連二連の作者の思いを理解します。 ・生きていることの証ともいえる事象（一連） ・生きることのすばらしさの定義として、全ての美しさに出会うこと。（二連）
	◇ア行を制するものは群読を制する。
○講評 ・生徒代表 ・学年主任の先生	人は愛することによって、より強く、自分の存在や生命について思いをはせる。そして生きることのすばらしさを感じ得る。

共感し、認め、支え合える友がいる

1 ねらい

- (1) 生徒会活動の中心となるべき時を認識させ、選挙の大切さを理解させる。
- (2) 選挙に立候補しようとする友の不安や悩みに共感し、力になり、支えてやろうとする気持ちを育む。
- (3) 候補者への応援体制をつくり、活動することによって、「選挙に参加した」という実感をもたせる。

2 指導の着眼点

- (1) 選挙活動を「学級づくり」に生かす
個々の人間関係を深めるための班づくりや自ら求めた「学級憲章」策定等を通し、努力の成果が見えつつある今、選挙活動を通して、互いにかかわり合い、わかり合うことによって学級づくりに役立てる。
⇒互いに本音を語り合い、認め支え合うことの大切さを知る。

学級憲章（一部抜粋）

- 第一条 わたしたちは仲間を傷つける行動・言動を絶対に行ないません
 第四条 わたしたちは勇気をもって まちがう事は、わづかしがる事を恐れずに発表（表現）することの自由を保障します
 第六条 わたしたちは仲間が困っているときに皆で協力する学級をつくります
 第九条 わたしたちはより良いクラスにするため学級に係をおきます

- (2) 生徒会役員は「我が代表」の意識を育む
リーダーはだれかがなるもの、忙しいから自分はしたくない、などかわりたがらないことがある。
これを機会に自発的・自治的活動が集団生活を向上させ、よりよい「校風」をつくることに気付かせる。
⇒不安を抱えながらも生徒会の牽引車になろうとする友に共感し支え合うことで心のつながりを深める。

3 展開の工夫

(1) 事前の手立て

①生徒会役員選挙の大切さを知る

○後期生徒会活動のリードすべき時が来たことを再認識させ参加意欲をもたせる。

⇒生徒会活動を自分たちに引き寄せて考える。

②共に悩み、支え合う気持ちを育む

○アンケートをとり、立候補の意志と今持っている悩みをまとめる。

○立候補予定者の不安や悩みをみんなで考え、解消する計画をたてる。

⇒自分がして欲しいことを、友にしてあげたいと思う気持ちがあるかが大切。

○立候補予定者の「不安・悩み」の中で学級全体で解決していかなければならないことを「カード」につくる

⇒友の「不安・悩み」解消に自分が協力できることは何かを考える。

7名がもつ悩み

- ア、自己表現がうまくできるか（3名）
 イ、意欲や展望がつかめない（1名）
 ウ、自分にあうか自信がもてない（3名）
 エ、みんなからの支援がえられるか（3名）
 オ、落選に対するおそれがある（2名）

(2) 事中の手立て

（＊詳細は次ページより参照）

⇒友の悩みを自分のこととして考えられる心情を醸成していく。

(3)事後の手立て

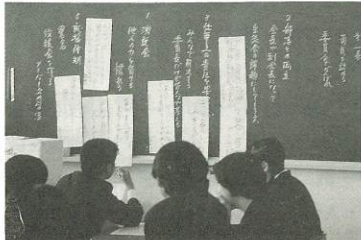
①担任の「悩みカード」の提示

②選挙結果から学ぶ

⇒今だからかわかることの大切さを知り
 かかわり合ってこそ「人間」になる。

4 中心活動の展開

活動の流れ	活動のポイント
①本時のめあてとその活動を知る 【教師の話】 ○この選挙の大切さの確認をする。 ○「立候補を考えている友の悩みをきいてやろう」板書する。 ②「候補者の決意・悩み」を聞く 【立候補予定者7名による全体発表】 ○資料を見ながら候補者の朗読を聞く。 ○悩みや不安を感じ取ったら資料に記入する。 R・Hさんの不安・悩み（要約） 本当にやりたいのか迷っている、自信がない、人の前に立って進めていける心配。 もうひとつの悩みは落選したら恥ずかしいということ。 本気でやる気になっても皆が応援してくれるか心配だ。 人前で話すことも文章にすることも苦手だから、そういうところを教えてください。 ③「候補者の悩み」に自分たちで協力できることは何かを話し合う 【話し合い（班毎）】 ○候補者の「悩みカード」13枚を黒板に掲示 ○「悩みカード」によって解消策を練る。 ――例 4班が選んだ「悩みカード」―― ・人前で自分のことをアピールできるだろうか ・自分をしっかりアピールできるか。 ・人前で話したり、文章を書いたりするのが苦手だから教えてくれる人がいるか。 班員＝文は誰かが書いてやるよ頑張れ ⇒ 候補＝だれに頼めばいいの 班員＝A君、文章得意だね？ かいてやれよ ⇒ A君＝… 班員＝皆頼めばこころよくOKだ これでもいいね？ ⇒ 候補＝どうしていいの？ 班員＝信頼できる人にいう、教えてもらおう、頼まれたらこころよく引き受ける、これで皆解決だね ⇒ 候補＝誰がいいか名前まで欲しい 班員＝まとめよう・友を見捨てられない、人任せにもできない、信頼できる人に書いてもらおう ・苦手な人に無理にお願いしないが班で責任をもって信頼できる人に頼む ・恥ずかしいなら終わりの会朝の会で練習するしかない ・みんなで協力して練習を繰り返して自信をつけよう ・友だちをどこまでも支えよう ・班内だけでなくクラス全体から依頼者を選ぶ	◇ひ弱でも過敏でも生きられる学校・学級であるように、友の気持ちを自分のこととして考える心構えを持たせたい。 ◇「悩み」として協力をえたい事や、学級の取り組みにしたいものは、代表者会で13枚のカードに作る  ◇各班で希望するカードを選ぶ カードに該当する候補者はその班の中に入る。 教師の指導＝それでいいのかな？ 誰にたのむかまで～ みんな逃げてはだめだ 教師の指導＝皆は解決したというが？ 候補者はまだ不安だというよ、もっと具体的に協力してやれよ 教師の指導＝候補者がこれならやれ ると納得するまで話し 合えよ

活動の流れ	活動のポイント
---4班で話し合い、まとめたこと--- ・演説文は文章のじょうずな人を書いてもらう。 ・依頼する人は班で選ぶ。 ・終わりの会や朝の会で練習し、自信をつける。 ・友だちだから最後まで応援する。	◇班の話し合いの中から ・一人では決意しかねているので背中をひと押ししてやるが必要な場面が多かった ・自分の「よさ」を友から言われることは、大きな自信につながった。
④、話し合いの結果報告 【発表（全体）】 ○各班からの報告 候補者一人ひとりがそれを評価し、自信をもてるようになったら、「悩み捨て箱」に捨てる。 （13枚のうち5枚のカードが投げ込まれる）  （もう1枚のカードが投げ込まれる）	◇「悩み捨て箱」は教師により提示 子どもたちのゆらぐ気持ちに対する時機をえたこまやかな気配りである。 思い切って「悩み捨て箱」にカードを投げ込む時が候補者の決断の時となる。  捨てきれずに残った8枚のカード
⑤、「先輩からのメッセージ」を聞く 【テープレコーダーによる（全体）】 「先輩のメッセージ」（要約） 新しいことをやるには勇気がいるものです。 私には目指す〇中があったので自分の思いをこめて立候補しました。クラスのみんながよく協力してくれました。それで友だちのありがたさ、クラス一丸になれたうれしさ等、その成果にとっても感動してしまいました。 でも選挙結果は落選で終わってしまいました。 みんなへのすまなさで心が揺れ動きましたが、そのあと感謝の気持ちでいっぱいになりました。 皆さんへお願いします。 立候補しようとする友を助けてください。 自分の考えを大勢に伝えることは気持ちのいいことです。やってみてください。 精一杯努力する事はすばらしいことです。 結果より自分が何をしたかが大切だと思います。	◇このメッセージは、失敗を厭わず、自分の目指すところに向かう姿勢を示してくれる適切なものであった。 ◇投げ込みきれないカードはこれからみんな考え、解決した時点で箱に捨てることにした教師の指導が暖かい。

IV まとめと今後の課題

- 生徒指導の研究については、これまでもさまざまな角度からの取り組みがなされてきました。しかし、どちらかといえば、校種ごとの取り組みが主で、小・中学校を通した研究は少なかったように思われます。つなげることで見えてきたもの、それが段差でした。
- 段差は無くするよう努力するものなのですが、保護膜に包まれた今の子どもには、むしろ越える力をつけてやることの方が大切であると考えました。
- 小学校から中学校にかけての3つの段差、本研究では、それを過渡期と名づけました。そして、それぞれの過渡期を如何に越えていくかが、その後の心の成長に大きくかわってくるのではないかと考えたのです。
- 過渡期の中で、わたしたちが特に注目したのは小学校中学年から中学校にかけての2つでした。いじめや不登校などの問題が顕著になるこの時期は、子どもの心の中で何か変化が生まれている時期であり、そして、教師には明確な指導理念が求められる時期であると考えたからです。
- 子どもが何かにつまずきころんだとき、わたしたちは子どもの自ら立ち上がろうとする心に熱い視線を向けて見守るようになりました。立ち上がる気力と体力、そして立ち上がるための知恵は子ども自身がしぼり出していく生きる力であると思ったからです。
- そこで、本稿では、教師のかかわりとしての大まかな手に細やかな目と節のあり方を一貫して問うています。
- 「水やり三年」という諺があります。その植物が植えられている鉢の種類や土の状態、生育のステージ、更にはその植物の生まれ故郷（原産地）など「育ちの環境」を知って水を与えなければ枯らしてしまう。…「心の育ちと教師のかかわり」を自ら問いかけながら、「生きる力」を育む教育活動の展開が見えます。
- 3年という限られた研究期間でしたが、むしろ、現実社会とのかかわりの中で指導することの難しさを一層痛感した毎日でした。実際「越える力」をどう育むかといった点など、全体として突っ込みが足りず、問題提起に終始してしまった感じがつよいわけですが、願わくば、なおその不足を補うに「教育は実践である」との視点に立ち、これらの事例をひとつのヒントとして、更に創意ある教育活動を組み立てられ、子どもと教師の心のキャッチボールの実践を積み上げられることを願います。

あ と が き

心を語る祖父母がいて、物の豊かさを築き上げた父母がいて、心の傷（トラウマ）を受けたくない子どもがいる。また、教員の世代間の交替もすすんでいる。こういう世代の不連続性の中で「心の教育」はどうあるべきか。ここに、生徒指導のむずかしさがある。腰を据えて取り組まなければならない所以である。

- 生徒指導は、機能である。従って、あらゆる教育活動に有効に働かねばならない。
- 教師の生きざまを垣間見せることによる全人格的な教育指導である。(Educational guidance)
- 子どもたちとの「心のキャッチボール」であり、それぞれ違った育ちや個性をもった子どもたちとつき合う「臨床の知恵」であって、マニュアルはない。
- 集団の中で行う、個に指向する指導である。
- それに終着駅はない。よりよい指導を求めて行脚する道行きである。

研究をすすめていく途上、いつも心にあったのはそういうことであった。

本研究は、3年次計画ですすめられ、2年間の県教育センタースタッフによる研究を引き継いで（フォーラムの受託研究）、本年度最終年次として、そのまとめを行ったものである。

研究の実践面においては、実際の授業に全面的にご協力をいただいた県内小・中学校の先生方からは、研究の裏付けに多くの示唆を与えていただき、まとめの大部分の紙面に生かすことができたことは大変ありがたかった。ここに特に記して感謝を申し上げたい。

研究内容は、まだまだ未熟ではありますが、現場の指導にささやかながらお役に立てれば幸甚これにすぐるものではありません。

平成9年3月

山形県教育文化フォーラム

研究部長 白 畑 博

平成9年3月18日 印刷

平成9年3月20日 発行

発行者 山形県教育文化フォーラム

天童市大字山元字犬倉津2515

TEL (0236) 54-9691

印刷所 アベ印刷株式会社

山形市船町52番地

TEL (0236) 81-1951

本誌は再生紙を使用しています。